



YOKOHAMA ASAHI ROTARY CLUB WEEKLY

世界へのプレゼントになろう

「世界へのプレゼントになろう」 Be a gift to the world

2015-16年度 RI会長/K.R.“ラビ”ラビンドラン RI/D2590ガバナー/箕田 敏彦 横浜旭RC会長/新川 尚

国際ロータリー第2590地区

横浜旭ロータリークラブ

事務所 横浜市旭区二俣川1-2 後藤ビル2F

TEL.045-365-3273

FAX.045-365-3132

Email:asahirc@titan.ocn.ne.jp

〒241-0821

例会場 二俣川相鉄ライフ4Fコミュニティサロン

例会日 毎週水曜日/12時30分~1時30分



2016年4月27日 第2241回例会 VOL. 47 No. 39

- 司 会 SAA 二宮麻理子
- 開会点鐘 会 長 新川 尚
- 斉 唱 それでこそロータリー
- SL 滝澤 亮

■出席報告

会 員 数	31 名	本日の出席数	19 名
本日の出席率	82.61%	修正出席率	100%

■本日の欠席者

鈴木、市川、佐藤 (真)

■他クラブ出席者

二宮 (麻) (神奈川 RC)

■会長報告

皆様こんにちは、昨日は横浜で24.7度ともう少しで夏日という気温でした。明日は最高気温17度の予報となっています。寒暖の差が大きくなっていますので、体調にお気をつけ下さい。熊本地震発生から2週間が経過しようとしています、時間の経過とともに被害の大きさが明らかになってきております。一連の地震による死者は49人にのぼり、14日夜~27日朝に発生した地震は940回を超えました。今後も余震や雨による土砂災害の発生が警戒されています。地区からの義援金の要請がきていますので、ご協力を宜しくお願ひします。

クラブの財政再建ですが、今月6日に(株)カナエル会議室、20日にクラブ事務所と2か所の変更候補地で例会を開催しましたが、皆様いかがでしたでしょうか。前年度からクラブ

の活動資金について現状の数字を挙げ、具体的な対策案を検討して参りました。会費の値上げや経費の削減を行いましたが、より抜本的な対策が必要であると考え、検討を重ねた結果、例会場の変更が効果的なのではないかとの意見が理事会の大勢を占めるに至りました。そこで、今年度2回目の情報集会で、具体的な数字と対策案、問題点などを示したうえで、議論頂き皆様のご意見をお聞きしたいと思います。更なる値上げはどうか、例会場の移転先はどこがよいのか、あるいは全く別の対策案などを議論していただきたいと思ひます。

○地区関係

エクアドル地震義援金に対するご協力依頼

日本時間4月17日8時58分頃、マグニチュード7.8の地震が南米エクアドル北部の太平洋沿岸を震源として発生しました。この地震による被害は甚大なもので広範囲に及んでいます。

当地区は日本の34地区の中で唯一エクアドル(D4400)と長年に亘りロータリー青少年交換プログラムを続けており、深く交流があります。今年度、エクアドルより来日しているロータリー青少年交換学生ミカエラさん(Bahia de Caraquez RC D4400)のご実家も全壊したとのことです。当地区として義援金を集めることといたしました。是非会員各位に御協力頂きたくよろしくお願い致します。

会員一人当たり1,000円

■幹事報告

1) 例会臨時変更のお知らせ

○横浜南ロータリークラブ

日時 4月30日(土)休会

■研修・広報委員会報告

第4グループ「母子の健康月間について」

参加者 新川、安藤、五十嵐、斎藤、市川

2014年10月RI理事会は重点分野である「母子の健康月間」である4月を、5歳未満の幼児の死亡率と罹患率の削減、妊婦の死亡率と罹患率の削減、より多くの母子に対する基本的な医療サービスの提供、保健従事者を対象として研修、保健ケアの提供、母子の健康に関連した仕事に従事することを旨とする専門職業人のための奨学金の支援を強調する月間とした。

現在、栄養失調や不十分な医療・衛生のために亡くなる5歳未満の子どもの数は、世界で約700万人と推定されていますが、ロータリーではこういった子どもたちの命を救うために活動をしています。

ハイチで産前産後の医療の提供をしていたり、母子を守る看護師を育成するプログラムを取り入れたり、産科医療の改善を通じて女性の健康と尊厳を守る活動、スリランカの孤島では、母子の為の保健キャンプといったロータリーによる母子の健康支援活動が行われています。又、母子の健康を向上させる為の教育、予防接種、お産キット、移動診療所も提供しています。ロータリーでは母子の命を守る活動や、母子の健康を支援する寄付をもとめている月間なのだ学びました。こうした活動は「My Rotary」というインターネットのサイトで見る事ができますので、世界でのロータリーの活動をご覧いただければと思います。

■雑誌委員会

「ロータリーの友4月号」

二宮麻理子

○横組み

P3. RI 会長メッセージ

ロータリー活動で得ることができる機会と活動についてのマザー・テレサのエピソードを紹介している。

P7. 子どもたち、若い人たちが夢をもてる未来のために③

淡路人形浄瑠璃（伝統芸能）への支援
（淡路三原 RC）

里山塾、里山体験（松江東 RC）等の紹介

P18. 米山梅吉記念館をロータリーの宝に

米山梅吉の生涯・ロータリーとの関わりな

どが紹介されている。

P26. 心は共に

東日本大震災 支援活動報告

浅草神社でフラダンス（東京浅草中央 RC）

○縦組み

P4. おらほの言葉

方言について

庄内弁の発音について特徴紹介

P20. 柳壇 大仏も健診受ける歳なのね

吉原則光会員

■国際奉仕・親睦委員会共催 漆原恵利子



■ニコニコBOX(会員敬称略)

新川 尚/関口さん、卓話宜しくお願ひします。

岡田 清七/関口さんの卓話、楽しく聞かせていただきます。

斎藤 善孝/関口さん、卓話楽しみです。

後藤 英則/①関口さん、卓話楽し味です。

安藤 公一/①関口さん、卓話宜しくお願ひします。②4/23、祝サンウルブス初勝利、昨年のラグビーワールドカップ第4位のアルゼンチン代表が大半を占めるジャガーズに勝ちました！

太田 幸治/関口友宏会員の卓話楽しみにしております。

佐藤 利明/関口さん、卓話楽しみにしています。

漆原恵利子/①関口さん、卓話楽しみです。②食を通じた国際交流会、皆様のご参加、ご協力をお願いいたします。

二宮麻理子/関口さん、本日の卓話楽しみにしています。

青木 邦弘/今日の卓話、関口さん、本当に

楽しみです。

滝澤 亮／関口さん、本日の卓話よろしく
お願い致します。

田川 富男／ダンディー関口さん、マナーを
教えて下さい。

秋内 繁／関口さん、本日の卓話楽しみで
す。関口さんのマナーを学ばせて頂きます。

関口 友宏／つまらぬ卓話です。しばらくご
辛抱下さい。

■一般卓話「東洋の作法と西洋のマナー」

関口 友宏



2015年度の訪日外国人客数が、2,000万人を突破したそうです。政府は2020年のオリンピックまでに、4,000万人を目標に上げています。

桜の枝を折る・勝手に敷地内に入って写真を撮る・指定場所以外での喫煙等、マナーに問題があったりしますが、国際収支には大きな貢献をしてくれています。国が変われば、言葉も習慣も違います。以前に読んだ世界の習慣やマナーについての本から、「東洋の作法と西洋のマナー」についてご紹介します。

ドイツでは、日曜日に引っ越しをしてはいけない。ユダヤ教の戒律を厳しく守る人たちは、牛肉と牛乳を一つの鍋で煮た料理を、決して食べようとしないし、同じ冷蔵庫の中にも入れない。アフリカのある部族は、トウモロコシは白いものしか食わず、黄色いトウモロコシをいくら援助物資として送っても、決して食べません。サウジアラビアでは、男が金のネックレスをして街中を歩いたら、逮捕されることさえあるという。こうしたことは、南半球だけにあるミステリー・ゾーンではなく、ドイツなどでも、日曜日に芝刈りや引っ越しをすると、警察に通報されることがあるそうです。それぞれの国には、その国の長い歴史によって育まれた文化があり、常識があります。

私たちにとって、それがたとえ理解を超え

るものであっても、そうした常識なり文化が、その国々の日常生活を秩序立ててきたということを知っておいた方がいいでしょう。しかし、常識は時には、誤解と偏見の上に築かれてしまうこともある。「飛行機を降りたら、日本人の着物姿が見られると思ったのに」と言った外国人観光客も、かつては沢山居たのだ。きっと彼らは、19世紀に日本を訪れた人たちの日記や紀行文によって伝えられたハラキリ・ゲイシャガールを、日本についての常識としてインプットされてしまったのだろう。そうした誤解は、1970年代にもまだ続いていた。その頃、日本に赴任することになったあるフランス人新聞記者は、日本では通信に伝書バトを使うと思い込んでいたので、ハトを手に入れるためにはどうしたらいいのか、出発前まで思い悩んでいたという。彼は子どもの頃、教科書でそう教わったために、大人になってからも同じ日本像を変わずに持っていたわけだ。

70年代の日本といえば、新幹線が走り、半導体が登場するなど、さまざまな分野で日本の躍進が世界に伝えられ始めた時代である。そうした情報が一方では入っていても、一度受け容れてしまった固定観念は、なかなか抜き難いということだろうか。しかし、私たちは、このフランス人記者を笑うことはできないと思う。例えば、アフリカについて聞かれた時、半裸の黒人とサバンナ、野生動物以外に、私たちはどのようなイメージを持っているのだろうか。日本人だけではない。殆どの方がお互いについて知らないのだと思う。

それは、私たちが知っていると思い込んでいるアメリカについても言えるのではないか。ニューヨークは恐ろしい街であり、銃による殺人が日常茶飯事のように起こっているなどといったアメリカ像は、映画やテレビで紹介された断片的な情報が、いつの間にか「常識」として固定してしまったものかも知れない。ごく普通のアメリカ人が何を考え、どのように生きているのかを、知る努力が先ず必要とされるのだと思う。

カエルを食べるといって、殆どの欧米人はぞっとする、と言う。しかし、中国人もフランス人もカエル料理に舌鼓を打つ。そして、「こんなうまい料理を食べないとは」、と他国人を笑う。「食」への偏見は、時には決定的であり、民族差別に直接繋がりがかねない。そのカエルがイヌになりクジラになった時に起こるであ

ろう反発と嫌悪は、容易に想像がつくだろう。しかし、人を分け隔てるものは食だけではない。身振りも挨拶も服装も、それぞれの考え方、常識を知らずにいるために、反発や誤解を招きやすい。例えばフィジーやサモアは、おおらかな南の島というイメージを勝手に持たれているが、ここでは、タンクトップやホットパンツは、猛烈な反発を受けるのだ。

また、東南アジアでは、子どもの頭をなでたりすると告訴されることがある。頭は、神聖なものだという根強い考えが彼らの中にあるからだ。

もちろん、こうした常識が形作られるまでには、その国々が辿った長い道筋があったのだと思う。しかも、その道は決して平坦な道ではなかっただろう。何世紀にもわたる他民族、他の文化との闘い、階級間の争いなど、表にはなかなか出てこない歴史の暗部もあったのではないかと想像される。だからこそ、どの国にも、簡単に譲ることのできない常識なり、生き方が今も根強く残っているのだと思う。ただ、常識という言葉でくくっても、それが、その国の総てを表しているわけではない。人によっても、時代によっても、常識は変わってくる。だから、これがこの国の常識だと決めつけることはできないと思う。

しかし、それでもある国、ある人々について、ぼんやりと見えてくるイメージがある。私たちはそれが何なのか、なぜそう見えるのかを知りたいと思う。そうすれば、映画を見る時も、海外ニュースを見る時も、そして何よりも彼らと接する時に、彼らの身振りや服装、表情やお互いが接近する際の微妙な距離感などについて、これまでとは全く違った新鮮な見方を持つる筈である。

国境が21世紀に生きる私たちを今も隔てているように、常識もまた、私たちの心を遠く隔てるものなのだろうか。もし、東は東、西は西、で終わらないことを信じるならば、私たちはお互いの文化、常識について知ろうとし、そのルーツを理解することが大事だと思う。そしてそのことによって、お互いの無知をあらためて知り、時にはその常識を修正してゆくことも、次の世代に対して、私たちが負う責務ではないか。

以上は、前文を読みましたが、次に本題の「東洋の作法と西洋のマナー」に入ります。

○笑顔の表と裏

あるエジプト人が、自国を訪れる観光客の

見分け方を教えてくれたことがある。彼の見立てによると、ニコニコして、やたらと愛想がいいのは日本人。韓国人は、どこに居ても目と口は動くものの顔に表情がない、というのだ。そのあたりの感じで、自分たちにとって見分けにくい東アジアの人々の区別をつけるのだという。日本人のあいまいな笑顔は誤解を招きやすい、とよく言われてきた。怒りや悲しみも、それを直接には表わさず、静かな頬笑みとしか取れないような表情を浮かべるといふのだ。私たちにとっては、あなたを受け容れましたよ、というサインなのだが。

また、照れ笑いも、日本人に特有のもではないが、外国人には、これが不真面目に映るといふ。愛想笑いも、度が過ぎれば卑屈なものとして嫌われるのはどこでも同じだが、日本ではこうした頬笑みが過剰なのではないか、と欧米人たちは感じているらしい。

あるイギリス人は、日本人が集まるパーティーに招かれたので、礼儀として笑顔を中心掛けていたら、後で顔の筋肉が強張ってしまったといふのだ。

笑いには、楽しい笑いから嘲笑まで、受け取り方にもさまざまなお国柄が出てくる。例えば、イギリスなどでは、私たちには何でもないクスクス笑いをギグリング (giggling) といつてひどく嫌うことがある。フィリピン人やタイ、カンボジアの人たちも、日本人と同じように、とても笑うような状況ではないところで笑うと、欧米人たちは言う。こうした頬笑みは、もしかしたら、東南アジアの諸民族に共通する何物かであるのかも知れない。

ところで欧米人は、時折、片方の眉だけを上げて、当惑交じりの表情を作ったりする。この仕草は、欧米人やアラブ人、アリア系のインド人など、コーカソイドに属する人々は普通にできるが、日本人はわずか10%位の人しかできないという。

例えば、インドの舞踏や大衆映画では、俳優たちの怒りや驚きを表す表情が、一種の決まりごとになっている。女優は、大きな目をいっぱいに見開き、喜怒哀楽をストレートに表現する。私たちには、うんざりするほど大きな表情は、勿論文化の産物ではあるのだろうが、もしかしたらそれは、彼らの顔のつくりや筋肉の機能に関係があるのかも知れない。つまり、欧米人に評判の悪いアジア系の「無表情」や「あいまいな笑顔」も、インド人や欧米人たちの「うんざりするような派手な

表情」も、文化や習慣だけではなく、顔立ちや筋肉の機能によるのかも知れないということだ。また、発音する言語によって、顔立ちも変わってくるという説もある。長くその国に暮らしていると、自然にその国の人の顔に似てくるというのだ。

○眼の表情読む世界

欧米の文化である握手は、今や世界共通の挨拶になっている。しかしこの握手も、握り方などによって、伝わるメッセージも変わってくる。ただ、その時も常に心に留めておくべきことは視線である。地中海世界では、古代から目についての信仰があるが、その地に住む人たちの中には、「東アジア人の目は、何を考えているのか分からないので苦手」という人もいるからだ。相手の目を直視するアイ・コンタクトは、日本人が想像している以上に重要な行為なのだ。欧米人は、勿論、これを常に意識して行っているし、アラブ人は欧米人よりも更にその傾向が強い。アイ・コンタクトを重視する欧米人さえ、アラブ人に対してはアイ・コンタクトが何よりも重要、と説いているほどなのだ。極端な言い方をすれば、彼らは相手の目の表情によって、その人が正直か、信頼できるかを判断しているということだ。だから、眼をそらせたり、伏せたりたりすることが謙虚とはならないということ、先ず知っておくべきだろう。

○正座は罪人の座り方

きちんとした座り方は、どんな座り方を言うのだろうか。例えば正座は、日本人にとっては、最も改まった時の座り方である。剣道、柔道、華道、茶道、邦楽も、この座り方によって、何となくおさまった形になる。

ところがこの正座は、世界的にみるとかなり特殊な座り方なのだ。イスラームの礼拝は正座をし、頭を地につけて祈るが、日常生活の中でこの姿勢を使うのは、日本の他では、グアテマラのマヤ系の先住民の女性など、ごく少数に限られている。

正座は、朝鮮半島では、囚人に強いる座り方とされている。正しい座り方どころか、苦痛や屈辱を与えるための座り方なのだ。韓国では、男女とも、あぐらに片膝を立てた座り方が正式である。もし日本人が、韓国の家庭に行って正座でもしようものなら、「何てことを！」とあって、韓国式の座り方を教えてくれるだろう。日本人にとっては行儀が悪いこの片膝立ては、中東では古代エジプトに起源

があり、今日のアラブ社会でも一般的な座り方とされている。

また日本では、男の座り方とされるあぐらは、ほぼ世界中で見られる。欧米人が床に座る時は、あぐらや立膝をすることが多い。韓国人も、実際は、あぐらの方がくつろげるという。インドのマハトマ・ガンディーのあぐら姿は、修行僧の精神をイメージさせるものだったが、南アジアでは、男女の別なく、あぐらが最も普通の座り方であり、オセアニアも同じだ。地面に近いところで生活する人々にとってのあぐらは、膝を抱えて座る姿勢とともに、最も楽な座り方なのだろう。ただし、タイなどは、横座りが正式な座り方とされている。また、東アフリカの一部地域の男性は、脚を前に投げ出し、腰を伸ばしたまま座る。背もたれもなしに、脚と背中をほぼ直角にした姿勢は、慣れない人がするとすぐに腰が痛くなってしまいが、彼らはこの姿勢で何時間も手作業をするのだ。座る、休む、という人間の基本的な姿勢さえ、生活環境、文化によって、これだけ変わってくるのだ。

○足の裏を見せるのは侮辱

ゆったりとしたソファーに深々と腰掛け、片膝にもう片方の足首を乗せたような姿勢でインタビューを受けるアメリカ人を、テレビや雑誌などで時々目にする。自信たっぷりの様子は、見てくれを重んじるアメリカ人ならではのスタイルなのだろう。

日本では、殆んど人は両足を地に付けるか、せいぜい足組みするような格好で座っている。しかし、最近では、日本人の若者が、電車の車内、待合室、大学の教室といった公共の場でも、平気でこうした座り方をしている。これは私たちにはひどく無作法に映るし、ヨーロッパでも、マナー違反と受け取られるだろう。ヨーロッパでは、たとえ靴を履いていても、足の裏を見せるのは良くない、と考えられているからだ。ただ、アメリカ人は、上品さより自分を誇示したり、くだけたスタイルを好むので、これを特に行儀が悪いとは思っていないようだ。

ところが、北アフリカ、アラブなどのイスラーム圏でこの座り方をしたら、マナー違反どころか、深刻な問題となりかねない。イスラーム圏では、相手に自分の足の裏を見せることは、失礼を通り越して相手を侮辱する行為とされているからだ。エジプトのように、欧米社会との接触が多い人たちは、そうした

観光客の行為について見て見ぬふりをしているかもしれないが、彼らも心の中では、不愉快に思っているのだということだけは、知っておいた方がいいと思う。それに、イスラム原理主義者たちからすると、こういった座り方こそは、悪しき欧米文化の墮落の象徴とも移りかねないので攻撃の標的にもされかねない。女性が足を組む座り方は、ビジネス・スーツを着ているということが前提で、もし、女性らしさをことさら強調するような服で大胆に足を組んだりすれば、男性を誘惑しているとも取られかねない。

○靴を脱ぐ屈辱、脱がない無礼

ある日本人女性がイタリアを旅行していた時、ローマから次の目的地である南イタリアへ列車で移動することになった。歩き疲れていたのも、ちょっと落ち着いたところで靴を脱ぎ、前の座席に足を掛けて座っていた。すると間もなく、近くに居た男性が話し掛けてきたので、これも旅の面白さと考えて、しばらく話し相手をしていたという。その内に、「いくらなんだい？」と聞かれて、初めてその男の意図に気付いたという。

これくらいで終わればまあ無事だが、アメリカ留学をしていたある日本人女性は、知り合いになった男の家へ遊びに行き、いつも癖で、つい絨毯の上で靴を脱いでしまったという。その後、ベッドに押し倒された彼女は、勇気を出して訴え出たのだが、陪審員は、男の家に行って靴まで脱いだのでは、自分から求めたと思われても仕方がないとして、男を無罪にしてしまったというのだ。

靴を脱ぐ、脱がないの感覚は、それぞれの国あるいは文化によって、正反対位の考え方の違いがある。欧米を旅する時、いつも靴を履いたままにしていることに、違和感や疲労感を覚える日本人は大勢いるだろう。

しかし、欧米人は玄関で靴を脱がされることに、違和感以上の強い抵抗感を覚えるようだ。あるイギリス人女性が日本家屋の家庭に招かれた時、生まれて初めて見知らぬ人たちの前で靴を脱ぎ、後で興奮しながら、「ビッグ・アドベンチャーだった」と親しい日本の友人に語ったことがあるという。日本などでは、時々、電車の中で靴を脱いでいる人が居るが、これは全く信じられないような光景だと、欧米人たちは言う。人前で靴を脱ぐのは、極端なことを言えば、人前で下着を脱ぐようなものではないか、と思う人々も居るのだ。

○なぜ靴を脱ぐのか

靴を脱ぐことへの意識が、こんなにも違ってしまったのだろう。

先ず、日本伝統の履物を思い出して頂きたい。通常は草履、下駄である。宗教儀式や作業用の履物として、足を包む形のものもあったが、基本的には、足の裏を保護するためのものだった。これは日本の風土が、欧米に比べて雨が多く湿度が高かったからだろう。靴のようなものだと、どうしても不快感があるし、それを履くまで履いているのはとても我慢できない。そのため、スーツに身を固め、ブランド物の靴で通勤する人も、オフィスではサンダルに履き替えるということになってしまっているのではないかと。とにかく、靴を脱いで、ようやく落ち着く、という生活習慣が私たちにはある。

一方、ニューヨークのビジネスマン達は、通勤時には、とにかく歩き易いものを履く。時には、スニーカーも珍しくない。ところが、オフィスに入れば、高級な靴、女性ならヒールのある靴に履き替えるのだ。日本とは考え方が逆である。とにかく、ニューヨーカー達は、戦場であるオフィスでは、いい靴に履き直して気を引き締めるというのだから、靴をサンダルに履き替えてほっとする日本人とは、根本的に考え方が違うのだろう。勿論これもいい、悪い、という問題ではないが。

○もしも国旗を踏んだら

タイというと、優しい頬笑みの国というイメージだろうか。しかし、この国にも、他の多くの国と同じように、外国人にはなかなか理解しにくい、厳しい側面がある。

ある日本人の女性観光客が、ホテルのロビーを歩いていた時のことである。ロビーの壁に掲げてあったタイの国旗が、風か何かで床に落ちていたらしい。ところが、おしゃべりに夢中になっていた彼女は、床に落ちていた国旗に気付かず、踏んでしまったというのだ。それを見たホテル警備の警察官がすぐさま飛んできて、不敬罪の現行犯で、いきなり彼女を逮捕したのだ。悪意がなかったということで、留置場に一晚留めおかれただけで済んだものの、タイ人にとって、国旗や国王、国を象徴するものへの思い入れは、日本人の常識では計り知れないほど強い。

■ 5/18(水) 旭区長 池戸 淳子様
週報担当 五十嵐 正